

【暗証聖句】

「愛する人たち、あなたがたを試みるために降りかかる火のような試練を、何か思いがけないことが起こったかのように、驚き怪しんではなりません。かえって、キリストの苦しみにあずかればあずかるほど、喜びなさい。それは、キリストの栄光が現れるときにも、喜びに満ち溢れるためです。」ペトロの手紙一 4 章 12、13 節

【日・驚き】

「愛する人たち、あなたがたを試みるために降りかかる火のような試練を、何か思いがけないことが起こったかのように、驚き怪しんではなりません」ペトロの手紙一 4 章 12

試練や困難は突然、やってくるものです。その際に、どのように対処したら良いのか、聖書は明快に答えています。まず、突如襲い来る試練を「驚き怪しむな」と言います。この「驚き怪しむ」という言葉は、「異質なもの」という意味合いがあります。つまり、ペテロは読者に突如襲い来る試練は、クリスチャンにとって異質なものではないと教えているわけです。神様を信じている人には試練は襲ってこないと思いがちですが、決してそうではないということです。また、「何か思いがけないことが起こったかのように」と付け加えられているのは、その試練は決して思いがけなく起こったものではなく、神様の許しと計画の中で起こっているものだということを暗示しています。そして、実際に襲い掛かってくる試練に関しては、「火のような試練」と書かれていますが、これは火によって精錬された信仰を養うために、主はその試練を許されているのだということを教えています。それゆえ、試練が襲ってきたときは、「かえって(喜びなさい)、キリストの苦しみにあずかればあずかるほど、喜びなさい。それは、キリストの栄光が現れるときにも、喜びに満ち溢れるためです」と、続くペトロの手紙一 4 章 13 節で教えられているのです。試練を喜ぶことは簡単なことではありません。しかし、試練の意味を知っていることは、私たちの支えとなることでしょう。「見えない、聞こえない、話せない」という三重苦を乗り越えたヘレン・ケラーは、「世の中はつらいことでいっぱいですが、それに打ち勝つことも満ち溢れています」と言いました。様々な試練は、ただ耐えるために与えられたものではありません。それを乗り越え、勝利する喜びを味わうためにも与えられているのです。

【月・サタンの試練】

「身を慎み、目を覚ましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたける獅子のように、誰かを食い尽くそうと歩き回っています。」ペトロの手紙一 5 章 8 節

このみ言葉は、悪魔の現実を教えています。しかも、悪魔は腹を空かせたライオンのように、神の子たちを狙っていると教えています。腹を空かせたライオンは非常に狂暴であり、獲物を狙って動き回り、狙った獲物は決して逃しません。もし、そのようなライオンと遭遇したら、ひとたまりもないことでしょう。悪魔を軽く考えてはなりません。もし私たちの霊的な目が開かれて悪魔や悪霊が動き回っているのを実際に見ることができたら、その恐ろしい姿に、きっとその場を逃げ去りたくなることでしょう。悪魔はそのことを知っていますから、私たちの前にその姿を現すことはしませんが、見えないからと言って存在していないわけではないということを感じる必要があります。あらゆる誘惑の背後に悪魔が吠え長ける獅子のように、誰かを食い尽くそうと歩きまわっていることを覚える必要があります。

しかし、悪魔が狙っているからといって、ただ逃げれば良いわけではありません。ペトロの手紙一 5 章 9 節を見ると、逃げるのではなく、「信仰をしっかりと保ち、悪魔に立ち向かいなさい」と書かれてあるのです。このとき鍵となるのは信仰です。イエス様が悪魔の前に立ちほだかり、私たちを守ってくださいます。罪の誘惑に負けてしまうときというのは、イエス様抜きで悪魔の前に立ってしまう時なのです。

【火・罪の試練】

ある女性が、職場のお金を不正に使い込んでいました。額はそれほど多くはなかったのですが、1回、2回と繰り返すごとにやめられなくなってしまい、実に3年もの間、使い込みを続けていったのでした。そして、ついに不正が発覚してしまったとき、彼女はこう言ったのでした。「こんなことを続けていたら、いつか天罰が降ると思っていました」と。罪の自覚はあったようです。そして、このまま罪を犯し続けていけば、いつか天罰が降るに違いないという思いもありました。しかし、やめられなかったのです。当然、会社はクビになり、信用も失ってしまいました。

ローマ1:18に次のように書かれてあります。

「不義によって真理を妨げる人間のあらゆる不敬虔と不義に対して、神は天から怒りを現されます。」

罪には必ず結果が伴います。神様は見過ごされることはありません。もし見過ごされるとするなら、御子が十字架におかかりになるはなかったのです。悪魔は神様は恐ろしい方だと思わせようとします。しかし、実際に罪を犯しているのは、私たちなのです。天から怒りを表されるのは、私たちに罪をやめさせるためであり、ご自分のもとに呼んでおられるからです。

【水・清めの試練】

エレミヤ9:6「それゆえ、万軍の主はこう言われる。見よ、わたしは娘なるわが民を火をもって溶かし、試す。まことに、彼らに対して何をすべきか」

万軍の主は、我が民を火をもって溶かし、試すと言われます。不純なものを私たちの中から取り除きたいと考えておられるのです。厳しい言葉に感じるかもしれませんが、主に近づけば近づくほど、もっと清いものになりたいという願いが私たちの中に生まれるのも事実です。神様の願いと私たちの願いは決して相反するものではないのです。しかし、時に痛みが伴うのはなぜなのでしょう。それは肉の思いがまだ残っているからです。オズワルド・チェンバーズは、「神の御霊が主のみ言葉を通してあなたの心に痛みを感じさせるなら、それは何か、完全に息の根を止めたいと主が望まれる何か、あなたの中にあるに違いないということなのです」と言っていますが、そうなのかもしれません。しかし、焦ることはありません。神様に委ね、任せましょう。痛みを感じるとき、責められていると思うよりも、清められているのだと前向きにとらえると良いかもしれません。むしろ、罪の感覚が麻痺して、痛みを感じなくなったときのほうが危険なのです。

【木・威嚇の試練】

ブルース・ウィルキンソンは、「あなたは神にあふれるばかりの豊かさを祈り求め、もっと御子のようにしてくださいと願っているのでしょうか。もしあなたの答えが「はい」なら、あなたは剪定ばさみで刈られることを求めているのです」と言っています。見た目には痛々しく見えるかもしれませんが、剪定をするのは、善い実を实らせたり、花を咲かせたりさせるためです。同じように、神様から不要な部分を剪定してもらうことで、神の子として良い実を实らせることができるのです。パウロはコリントの信徒への手紙二12章7節で「また、あの啓示された事があまりにもすばらしいからです。それで、そのために思い上がることのないようにと、わたしの身に一つのとげが与えられました。それは、思い上がらないように、わたしを痛めつけるために、サタンから送られた使いです」と言っています。パウロは、何か痛みの伴う病気を持っていたようですが、癒されるようにと何度祈っても癒されなかったとき、それを自分が高慢にならないように与えられたもののだと理解しました。まさに、神の剪定であります。パウロは、それを「とげ」と呼び、サタンから送られた使いと言いました。これは、神様がパウロを、この痛みの伴う病気にさせたのではなく、サタンがこの病気をもたらすのを止めなかったということです。サタンの攻撃さえ神は用いて、ご自分の目的を実行されることがあるということです。